跡見学園女子大学文学部紀要　第 49 号　2014

日清戦争　再考（前篇：史料の提示）

――イサベラ・バード著『朝鮮紀行』が捉えた近代日本と「アジア」――

The Sino-Japanese War Revisited: Modern Japan and “Asia” Represented in *Korea and Her Neighbours* by Isabella Bird (Bishop)

森　まり子

Mariko MORI

要　旨

本稿は、日本の歴史認識のあり方をめぐって近隣諸国との緊張が高まっている現状への憂慮から執筆されたものである。隣国との歴史論争は今までにも存在した。しかし昨今政府関係者が表明している歴史解釈は、戦後の日本の国民が享受してきた思想・言論の自由、ひいては政治的自由に制限を加える方向性と深い部分で結び付いており、かつてなく危惧すべき要素を含んでいる。この危機に気付きながら沈黙する事は歴史学者としての良心に反するため、論考としての完成度は低くならざるを得ない事を承知の上で、敢えて早期に公表する事を選んだ。もともと私は専門とする中東近代史研究を土台として、日本や欧米の近世・近代史と比較しつつ「近代日本とアジア」という政治思想史的テーマを将来的に展開する構想を持っていたが、時代の要請に応じる必要を感じたため、現在の専門を追究しながらこの課題への着手を早める事を決心した。本稿はその嚆矢となる。要旨は「はじめに」に尽くされているので、以下、目次を掲げる。

はじめに――本論考（前篇・後篇両方）を貫く問題意識と、前篇（本稿）の役割――
1. バードの経歴と『朝鮮紀行』の背景
（1）バードの経歴と朝鮮旅行の背景　（2）『朝鮮紀行』のルート
2. 『朝鮮紀行』の史料的価値――日本、イギリス、朝鮮の視点から――
（1）日本から見た『朝鮮紀行』　（2）イギリスから見た『朝鮮紀行』　（3）朝鮮から見た『朝鮮紀行』
3. 史料の提示――『朝鮮紀行』が捉えた日清戦争期の朝鮮と、朝鮮における日本人――
（1）日清戦争前の朝鮮における日本の存在感――日本人居留地――
（2）東学党の乱と日本の朝鮮への派兵
（3）日清戦争期の満州（奉天）――清国領で見た日清戦争――
（4）日清戦争中（1894 年秋）の長崎とウラジオストク――経由地の見聞――
（5）日清戦争中の沿海州（ロシア・朝鮮国境付近）
（6）日清戦争中の朝鮮における日本の行動
①日清戦争の代償――日本軍の大量の戦死者――　②朝鮮王室への圧迫（1895 年 1 月）
③国王夫妻との会見（1895 年 1 ～2 月）　④日本が朝鮮に要求した国政改革の過渡期の混沌（1895 年 1 月）
（7）閔妃暗殺
（8）日清戦争が朝鮮に残した傷跡――北部への旅――
（9）日清戦争後の朝鮮内政と日本の後退（1896 年）
（10）バードの結論――1897 年から見た日清戦争の意味――
結びに代えて――前篇の暫定的な結論――

はじめに　――本論考（前篇・後篇両方）を貫く問題意識と、前篇（本稿）[1] の役割――

今の日本人の歴史意識の中で、明治日本が直面した二つの対外戦争のうち、日清戦争は日露戦争より存在感が薄い [2]。例えば日清戦争が朝鮮を戦場とし、平壌などに荒廃をもたらす一方、日本軍戦死者の墓地まで朝鮮に残した事は、日露戦争における旅順陥落や日本海海戦ほど一般に広く知られていないと思われる [3]。

このような一般の日本人の歴史認識は、国民的人気を博した司馬遼太郎の小説『坂の上の雲』[4] の影響によるところが大きい。同書を含めた司馬の著作によって、日露戦争は「祖国防衛戦争」かつ明治日本の栄光の頂点であり、「国民」を一つにした出来事であったが、この戦争以後日本は方向性を誤り昭和の戦争に突入したという見方が、一般に広く浸透したとされる [5]。本論考ではこの見方を「国民史観」[6] と呼ぶ事とするが、この史観は、何故日清戦争よりも日露戦争に焦点を当てるのか、という問題を説明していない。「国民を一つにした」点では日清戦争も同じであったのではないか。しかも司馬自身、両戦争とも「祖国防衛戦争」であったとしているにもかかわらず [7]、彼は何故日清戦争よりも日露戦争に重きをおく叙述 [8] を選んだのであろうか。

日清戦争の位置づけについては、現在のアカデミズム史学は上記の「国民史観」とは懸隔のある見方を通説としている。簡潔に言えば、日清戦争こそが国民意識の成立の大きな契機であり [9]、日清戦争は日露戦争を経て韓国併合へ至る道程の重要な「起点」として、朝鮮への侵略性の側面からも改めて説明されるようになっている [10]。それにもかかわらず『坂の上の雲』における日露戦争の強調、日清戦争についての叙述の不足と偏りが一般の日本人の歴史認識をいまだに根強く規定しているのは何故か。『坂の上の雲』の文学的魅力はその一因であろうが、もう一つの根本的な要因として、このような選択的語りが近代の日本人の「アジア」[11] 観と合致し、かつ戦後の日本人が国民としての自信を回復し今も維持する上で「快い」語りであり続けているからではないか。具体的に説明すると、とりわけ日清戦争の勝利以降、日本人の意識の中で明示的にヨーロッパが優越的な位置を占め、「アジア」は語るに値しない存在として本質的な関心の外にあり続けてきたからではないか。かつ、日露戦争がヨーロッパの大国ロシアの脅威に対する自衛戦争として位置づけやすいのに比べ、「アジアの戦争」であった日清戦争については、明らかな脅威に対する自衛戦争としての正当化が成り立ちにくく、しかも自衛どころか「アジア」への侵略性すらあったとすれば、この戦争を詳しく語る事によって、戦後の日本人を自信喪失から救うために暗黙裡に必要とされた「栄光の明治、逸脱の昭和」（昭和の戦争は明治からの連続ではなく逸脱にすぎない）の論法が崩れる恐れがあったからではないか[12]。

すなわち一般の日本人にとっては、日清戦争は曖昧にしておいて日露戦争を中心に論じた方が、上に述べたような意味で「分かりやすく、論争性が少なかった」のだと思われる。このような国民感情の暗黙の機微を捉え、日清戦争への深い言及を避けて、両戦争の正に原因となった朝鮮の状況と日本の関わりという不都合な部分については殆ど語らなかったのが『坂の上の雲』であった。この小説を多くの日本人が疑問を持たずに受容してきた事実そのものが、近代日本と「アジア」の関係の本質を

物語っているのではないだろうか。

本論考はこのような問題意識から、上記の「国民史観」と明らかに異なる歴史像を早くも 19 世紀末に提示している史料として、イギリス人旅行家イサベラ・バード（Isabella L.Bird［Bishop］,1831 -1904）の『朝鮮紀行』（*Korea and Her Neighbours, A Narrative of Travel, with an Account of the Vicissitudes and Position of the Country*, 1898）[13] に注目する。同書は「国民史観」の語りから除外されてきた日清戦争と日本の朝鮮政策の実態を、同時代のヨーロッパ人の視点から描く貴重な目撃証言である。また日露戦争に先立つ日清戦争こそが、近代日本の国民形成の上でも「アジア」への関わり方の上でも分岐点であったのではないかと考えさせる叙述や、『坂の上の雲』の歴史観に対する学問的な立場からの批判の正しさを裏付ける見聞を含んでいる。本論考は紙幅の制約上、前篇と後篇に分け、前篇（本稿）では『朝鮮紀行』の中で上に述べた関心に沿う叙述を抽出・提示し、主な考察は後篇に譲る。

1. バードの経歴と『朝鮮紀行』の背景

まず著者バードの経歴と、朝鮮旅行の背景及びルートの詳細を見ておきたい。

(1) バードの経歴と朝鮮旅行の背景 [14]

牧師の家に生まれたバードは、病弱な体質を改善するため精力的に世界各地を旅した。明治初期の北海道や京都・伊勢方面の旅（1871）を記した『日本奥地紀行』（1880）[15] は名高く、英露の帝国主義的角逐の焦点であったイラン方面への旅（1890）は『ペルシア・クルディスタン紀行』（1891）[16] に結実する。その後 60 代のバードは極東を旅し、『朝鮮紀行』（1898）と『中国奥地紀行』（1899）を書いて名声を確立する。朝鮮には、日清戦争とその前後を含む 1894 年 2 月から 1897 年 3 月にかけて中断を挟みながら滞在している。

バードの極東旅行はイギリス政府と関係した調査の使命と関わっていたのではないか、という推測もある。しかし当時列強の国民が未知の土地へ旅する事は、一私人であっても、目的地と現地情勢によっては帝国主義的意味合いを持った事は否定できない。従って朝鮮総領事ヒリアー（Walter C.Hillier）の序文執筆などをもって直ちに、バードが政府の特命を帯びていた証拠 [17] とは断定できないと思われる。朝鮮と中国はイギリスにとって対露関係上微妙な地域であり、またバードは生い立ち故にキリスト教の伝道に関心を持っていたため、叙述に帝国主義の影が時折忍び込むのも、ある程度はこの時代の個人の宿命であったと言えよう。

(2)『朝鮮紀行』のルート

1894 年 2 月に朝鮮に入ったバードは、4～6 月に小舟で南漢江と北漢江を遡行し、元山を経て済物浦に戻り、東学党の乱 [18] による混乱した情勢のため奉天へ行く。1894 年 8 月に日清戦争が起きたため、外国人の退去指示に従って奉天を去り、次いで長崎からウラジオストク [19] に至り（以上第 1 部、以下第 2 部）、沿海州を旅して朝鮮人移民の生活を見聞した。1894 年末にウラジオストクを発ち、長崎などを経由して翌 1895 年 1 月初にソウル（漢城）[20] に入り、ヒリアー宅に 5 週間滞在した。この

間に日本軍が占拠する王宮を四度訪れて国王夫妻 (21) に拝謁している。1895 年 2 月中旬にソウルを後にして中国を旅し、その後日本で静養した。10 月に長崎で閔妃暗殺の報を聞いてソウルへ戻り、一か月間イギリス公使館に滞在する。11 月初に朝鮮北西部への旅に出るが、平壌とその近郊で日清戦争の爪痕を目撃する。その後 1895 年のクリスマスに朝鮮を離れ、揚子江流域への旅に出た。この旅行で 6 か月、日本で 3 か月過ごした後、1896 年 10 月から 1897 年 3 月まで再びソウルに滞在する。

2.『朝鮮紀行』の史料的価値　――日本、イギリス、朝鮮の視点から――

次に本書に対する評価を概観しつつ、学術的史料としての本書の価値を見ておきたい。

(1) 日本から見た『朝鮮紀行』

本書は民俗学的資料としても価値があるが、政治史を補完する史料として見ると、日清戦争と日本の朝鮮政策、ひいてはより広く近代日本と「アジア」の関係についての現代日本人の歴史認識の空隙を埋める目撃証言を含んでいる事に意義がある。しかもその証言は、著者が『日本奥地紀行』を著した親日家である故に、いわば「共感者からの批判」としての側面も持ち、従って日本人にとっては何がしかの真実を含むものとして無視しがたい。バードの証言の意味は、例えば『坂の上の雲』の叙述と比較すると明確になるが、詳しくは後篇に譲りたい。

(2) イギリスから見た『朝鮮紀行』

バード自身は前書きで同書を「朝鮮内陸ばかりでなく、政情の混迷する首都において」目撃した全てを記そうとした「真摯な試み」[10～11] (22) と自負する。バードを支援したヒリアーも序文で、「折しも朝鮮は日清戦争の戦中戦後という局面にあり、これまで誤報や誇張でうやむやにされてきた極東の歴史的事件のさまざまなディテールを公正かつ正確に記録する好機にも恵まれた」[3]バードの「観察眼の細やかさ、書かれた事実の正確さ、推論の適切さ」[3] や、彼女が「実地におもむき共感をこめて観察」し「臨場感あふれる描写で記録」[7] した事を高く評価する。他方ヒリアーの高い評価の背景には、「現在朝鮮が国として存続するには、大なり小なり保護状態におかれることが絶対的に必要」[4] という自らの持論とバードの結論が一致していた事情もあったと考えられる。大英帝国の外交官にとっては、ロシアの動向の記録を含む点でも有用な本だったであろう。

(3) 朝鮮から見た『朝鮮紀行』

東洋文庫版『朝鮮奥地紀行』(23) の訳者である朴尚得（1927 年生まれ）と、解説者である権又根は同世代の在日朝鮮人であり、彼らも同書を総じて高く評価する。李朝末期の朝鮮社会の実像を内部から捉えた漢文の史書『梅泉野録』（著者は黄炫）と共通性があり、かつそれを補完する「外からのきびしいプリズム光線」としての史料的価値を持つ (24) とも指摘する。

権又根は「解説」(25) の中でバードの滞在の短さと旅行の地理的限定性を指摘しつつも「むしろそのことが予断の少ないみずみずしさと、凝集された確かさで十九世紀末朝鮮の人と社会と自然を見つめさせた」として、「多少の制約は考慮しても一次資料・史料としての価値は高いものがある」「客観

性と正確さが本書の特性であり真価である」と評価する。国王夫妻の人間像の活写、東学党の「愛国心」への「強い理解」、李朝末期の「無秩序で堕落した封建官僚政治」の病理の鋭い分析と共に、バードが「朝鮮を理解し愛しようとしていたこと」が窺われるとし、本書が「今日では再生不可能な歴史の証言として高い価値を持つだけでなく、当時、欧米人による朝鮮旅行記・観察記のいくつかが発刊されているが、それらと比べても質の高いもの」であり「十九世紀末の先駆的欧米人の啓蒙的朝鮮観」を表していると見る。

その一方で朝鮮人の立場からは当然とも言える批判も述べている。「非西欧の異文化への無理解と蔑視」からバードも自由ではなく、独断と偏見が随所にあるが、特にバードが「平然と」述べる「朝鮮は内部からの改革が不可能なので、外部から改革されねばならない」という「日本軍国主義の朝鮮侵略の口実と同じ発想」は「朝鮮人たる者には心穏やかに読めない侮蔑と誤認の表現」であるという。但しバードのそうした認識の背後には、「本書脱稿五年後に軍事的な日英同盟が結ばれ、日露戦争へと連なっていく」時代の趨勢があるとも指摘する。

歴史的な経緯から日本に対して特に厳しい批評眼を持つ在日朝鮮知識人が、批判しつつも総じて高い評価を与えている事は、『朝鮮紀行』が朝鮮から見ても比較的客観性のある史料であると判断する根拠になるであろう。

3. 史料の提示　――『朝鮮紀行』が捉えた日清戦争期の朝鮮と、朝鮮における日本人――

本書の史料的価値を踏まえた上で、本節では本論考の関心に沿う部分を抽出・提示する。バード自身の所感と全体的な文脈を把握するのに役立つ周辺状況も併せて提示する。

(1) 日清戦争前の朝鮮における日本の存在感　――日本人居留地――

1894 年 2 月、釜山 [26] に着いたバードの目を最初に引いたのが日本人居留地であった。

釜山の居留地はどの点から見ても日本である。5508 人という在留日本人の人口に加え、日本人漁師 8000 人という水上生活者の人口がある。日本の総領事は瀟洒な西洋館に住んでいる。銀行業務は東京の第一銀行が引き受け、郵便と電信業務も日本人の手で行われている。居留地が清潔なのも日本的であれば、朝鮮人には未知の産業、たとえば機械による精米、捕鯨、酒造、フカひれやナマコや魚肥の加工といった産業の導入も日本が行った。魚肥は臭いにおいを放つものの、日本へ大量輸出されている。［改行］・・・わたしとしても日本人のことばかり書きたくはないが、・・・日本人がいるのは釜山のれっきとした事実なのである。［改行］・・・砦はとても古いものの、なかの市街［釜山の旧市街］は三世紀前の構想にそって日本人の手で近代化されている。［39～40］ [27]

日本人居留地はこれ［清国人居留地］よりはるかに人口も多く、街も広くてもったいぶっている。領事館は公館としては充分に立派である。街には小さな焦点のならぶ通りが何本かあるが、扱っている商品はおもに自国の人々の需要をみたすものである。というのも・・・三世紀にわたる［豊臣秀吉の朝鮮出兵以来の］憎悪をいだいている朝鮮人は日本人が大嫌いで、おもに清国人と取り引きしているからである。しかし貿易では清国人に凌駕されてはいるものの、朝鮮における日本人の立場は、日清戦争前ですら影響力のあるものであった。彼らは条約港とソウルのあいだに「郵便施設」を備えて外国郵便を運び、首都および条約港に国立第一銀行の支店を開いた。在留外国人はこの銀行に・・・全幅の信頼を置いている。・・・イギリスの努力不足のせいで、日本人は自国の綿

布をうまく朝鮮に割りこませている。1887 年には輸入の 3%にすぎなかったのに、1894 年には 40%あたりまで上昇させてしまった。・・・日本は汽船および帆船のトン数ではトップである。・・・［47～48、下線引用者、以下同じ］II

元山の日本人街は「朝鮮国内で最も整然として魅力的な町」であった。

通りは広くて手入れが行き届き、波止場は整然とし、家々はこぎれいかつじょうぶで、つんと取り澄まして諸事にうるさい日本人の性格をあらわしている。和洋折衷の大きくてとても目立つ日本領事館、日本郵船会社「NYK」の社屋・・・、定評のある日本の銀行、・・・西洋の品物が手ごろな値段で購えるこぎれいな日本の商店、・・・。こういったものを特徴とするこの気持ちのいい日本人居留地は、幸運にも歴史を持たず、その発展は急速ではないものの、平和でおだやかで、朝鮮その他の外国との軋轢に損なわれてはいない。先ごろの戦争［日清戦争］ですら、清国領事とわずかにいたその同国人を退去させたとはいえ、それは人口からいえば微々たる数で、この町にはこれといった爪痕を残さなかった。・・・［224］III

反面、バードは小ぎれいな日本人居留地の外に広がる朝鮮人街の不潔な路地と貧しさ、朝鮮人の反日感情も見落としていない（以下はソウルについての描写）。

南山の斜面には簡素で地味な白い木造の日本公使館があり、その下には・・・人口ほぼ 5000 人の日本人居留地がある。ここでは朝鮮的なものとはきわめて対照的に、あくまで清潔で几帳面で慎ましい商店街や家々が見られる。・・・将校は一定間隔で警備を交代するが、朝鮮では反日感情が根強いためこのような警戒が必要で、日本公使館員が戦いをまじえつつ海まで逃げざるをえなかったことが二度あった。(28) わたしがはじめてソウルを訪れた当時、日本公使を務めていたのは、白い頬ひげをたらした大鳥［圭介］氏で、ソウルご自慢の小さな社交界によく姿を見せていた。たあいもない話をしていた初老の公使には、その数ヶ月後に見せた荒々しい気迫をうかがわせるようなところは全く何もなかった。・・・［64］IV

「清国人は・・・朝鮮人に対してはまずまずよかった。これに比べれば、日本人の朝鮮人に対する態度は話にならない」［65］とバードは指摘し、日本人居留民は「いばりちらす癖がかなりあった」［567］とも記す。日清戦争前から日本人居留民が朝鮮人に対して高圧的に振舞っていた様子が窺われるが (29)、その背景にあったのが朝鮮で増大しつつあった、日本国家そのものの存在感であった。バードは日本が朝鮮全土から徴収した米を日清戦争のための備蓄に廻した結果米価の高騰を招いたと指摘しているが、日清戦争が「準備された戦争」であった事を示す証言である。

・・・日本は朝鮮政府に圧力をかけて米の輸出を禁じる法令を棚上げさせており、いつかある日を期して堰を切ることになっていた。浜には積み上げた米俵の山がならび、道路では計っては俵につめた米をむしろの上に積み上げ、・・・港外停泊地では何隻もの日本の汽船と帆船が出港停止の解除を待っていた。三月六日の深夜のことである。街や浜にはいつもながらの米についてのかまびすしいやりとりが広がり、朝鮮人の間には自分たちの食糧の主要品目である米の値上がりに対する不満が広がっていた。日本人官吏が米を求めて朝鮮全土を捜しまわり、消費分からあまりそうな米は一握り残らず、当時朝鮮では誰一人起きるとは夢にも思わなかった戦争への備蓄にまわされた。・・・［48～49］V

（2）東学党の乱と日本の朝鮮への派兵

元山でバードは東学党の乱についての噂を耳にした。

・・・わたしが出発する前の最新の風聞は、東学党は大変な勢いで釜山に進軍しているというものだった。東学党が流した檄文は、腐敗した官僚と大逆的な政府顧問に対して蜂起すると述べる一方で、王室に対しては不動の忠誠を言明しており、この檄文から判断すると、もしも朝鮮のどこかに憂国の脈動があるとすれば、それは彼ら農民の胸の中にあるように思われた。東学党は蜂起に際して過度かつむだな殺戮は行っていないらしく、自らの行動を改革計画実行の企てのみに制限していた。外国人の中にも東学党に共鳴する声はあった。なぜなら悪政はこれ以上ひどくなりようのない状態で、あまりな搾取に対し、よくある農民蜂起を超えた規模で武装抗議するための時は熟していると考えられたからである。［229～230］ VI

東学党のナショナリズムについての指摘は注目される。バードは 1894 年 6 月 19 日に釜山に到着したが、釜山港には日本の砲艦が停泊していた。大規模な商業街を持つ日本人が防衛に過敏になるのは当然と当初は受け取られていたが、21 日に済物浦にバードが到着した時には日本の軍艦 6 隻が外港に待機し、「活気のなかったこの港町は変貌」［231］していた。

・・・通りには重々しく行進する日本軍の靴音が響き、むしろや馬糧を載せた荷車の列が道をふさいでいる。日本人街の本道に沿った家々はどこも兵隊宿舎に変わって込み合い、・・・朝鮮人の群衆はとまどったようすで通りをのろのろと歩いたり、小山にすわったりしながら、自分たちの港町が外国人の野営地に変わるのをうつろに眺めていた。軍隊の第一陣が上陸してまだ二時間とたっていないころ、わたしは若いロシア人将校と野営地を訪ねたが、そこには 1200 人の兵士がいた。キャンバス地のテントは・・・換気がよく、床にはむしろを敷いて排水溝が切ってある。またうるし塗りの弁当箱で夕食が配られていた。・・・野営地は通りもきちんとしており、秩序があってこぎれいで静かだった。町では番兵が通行人を呼びとめて誰何している。どの兵士も自分の任務を心得、それを全うする気でいるように見える。高慢なところはひとつもない。軍服を着て充分に武装した矮人たちは、明らかに目的を果たす心づもりで朝鮮に来ている。その目的をうまく隠しているのは、東学党の反乱が成功すれば、朝鮮在住の日本人が危険にさらされかねないからそれを守るという口実である。［231］ VII

バードは日本軍の規律正しさに注目しつつ、日本の「口実」と真の目的を区別する。そして東学党が「ソウルその他の都市部においても多数の支持者を得るほど広範に組織された、とても重要な運動」で「きわめて明確で正当な目標を掲げており」、「その主導者たちを『逆徒』ではなく『武装改革者』と呼びそうになったほど」（232）である反面、「好都合な干渉の口実」を日本に与えてしまった［234］と指摘する [30]。

朝鮮にとって国の存亡に関わり、外交的に最重要な意味合いを持つ疑問は、「日本の目的はなにか。これは侵略ではないのか。日本は敵として来たのか、味方として来たのか」であった。6000 人の軍隊が三ヶ月の駐屯予定で上陸したのである。・・・日本軍は・・・たいへんな戦力でソウル郊外の南漢山を本営としてしまった。そしてここから王宮と首都の両方に指令を出した。こういった動きはすべてだしぬけに行われ、また速やかに支障なく運ばれたのであるから、その軍事行動力は最大級の賞賛に値した。［234］

極東政治情勢の学徒ならだれしも、この日本軍の巧妙かつ常軌を逸した動きが済物浦やソウルの日本人街を守るためにとられたものではないこと、といって朝鮮に対してとられたものでもないことがわかっていたはずである。ぐらついた日本の内閣が失墜か海外派兵かの二者択一を迫られたのだと様々な筋は言い、またそう信じた。しかしこれは全くのこじつけである [31]。日本が何年も前からこのような動きを計画していたことは疑問の余地が

ない。朝鮮の正確な地図をつくり、飼料や食糧についての報告書を作成し、河川の幅や浅瀬の深さを測り、三ヶ月分の米を朝鮮で備蓄していたのであるから。そしてその一方で、変装した日本人将校がチベットとの国境にまでも足を運んで清国の強みと弱みを調べあげ、・・・報告していたのであるから。彼らは・・・清国が、戦闘を維持するのはおろか、まともな軍隊を戦場に送りこむことすらとうてい不可能であることも知っていたのである。［234～235］VIII

日本が以前から入念に計画した戦争であったという観察 (32) は注目される。更にバードは大鳥圭介（朝鮮公使、在勤 1893～1894 年）が「一変」して「荒っぽく、精力的かつ有能で、非人道的な行動家としての面を見せ」た［237］事 (33) も見逃していない。バードの目に日本の行動は、受け身の防衛戦争ではなく、他の意図を疑わせる要素を持つものと映っていた。バードはこの直後、副領事の忠告により朝鮮を離れる。

（3）日清戦争期の満州（奉天）――清国領で見た日清戦争――

二か月間の満州滞在の記録で注目されるのは、清国軍の装備の貧弱さと士気の低さの指摘である。「ライフル銃やクルップ銃を買いつけている帝国で防衛手段を弓矢に頼っているのは実に妙なことである。後に北京では日本軍による攻撃に備え、城壁銃眼に弓矢を持った旗手を配置させることになった。わたしも北京と通州を結ぶ路上で 20 台の荷車がこの原始的な武器を運んでいるのを見かけたが、何と首都の防備に使うというのである！」［245］IX

バードは 1894 年 7 月、戦争の噂で持ちきりの牛荘から大洪水で溢れた遼河を航行し、奉天に着く。北京と同様の省庁がおかれ、現王朝との関係により優遇されている清国第二の都市の活気を描写した後、バードは日清開戦の経緯を説明するが、7 月 23 日の日本軍による王宮占拠 (34) に言及している事に注目したい。東学党の乱を機とした日清両国の朝鮮派兵と両国間の折衝の後、「7 月 20 日、日本は朝鮮国王に対し清国軍への撤退命令を要求し、それに応じなければ『決定的手段』を講ずると威嚇した。［改行］一方、朝鮮国王の要請により、条約国列強の代表は・・・両国に同時撤退を提案した。清はこれに応じたが、日本は延期を要求し、7 月 23 日、・・・『決定的手段』に訴えて王宮を強襲占拠し、事実上国王を幽閉してしまった。そして国王の父大院君がみずからの要請により支配権を名目上は握ることになったが、これが日本軍の煽動によるものであることは疑いの余地がない。」［266］X

この後 7 月末から宣戦布告（8 月 1 日）後にかけて朝鮮をめざす清国軍が奉天を続々と通過するが、その無規律と掠奪、装備の貧弱さをバードは活写している。

・・・吉林、斉斉哈爾その他の北部都市から集めた、訓練を受けていない満州族兵士が一日 1000 人の割りで奉天を通過していった。満州族兵士は南進する途中、手当たり次第にものを略奪し、料金も払わずに宿屋を勝手に占領し、宿の主人をなぐり、キリスト教へのというより西洋文明への反感からキリスト教聖堂を荒らした。・・・［改行］外国人への反感は奉天でもみるみる高まった。外国人の使用人は・・・町中で攻撃を受け、・・・大集団である現地人のキリスト教信者は一般に「日本人と同一」視されている「西洋人の一味」と見なされ、自分たちの身の安全を深刻に危ぶまざるをえなくなった。［改行］・・・奉天に向かうすべての道路は兵士でごった返した。行進とはほど遠いだらだらした歩き方で、10 人ごとに絹地の大きな旗を掲げているが、近代的な武器を装備している兵はごくわずかしかいない。ライフル銃一丁持たない屈強な体つきの連隊すらある！・・・さびだらけで旧

式の先込めマスケット銃か長い火縄銃を持っていたり、あるいは槍か赤い棒の先に銃剣をつけただけという隊もある。全員が傘と扇をたずさえており、同じ傘と扇をわたしはしばらくのち、血なまぐさい平壌の戦場跡で見た。正確無比の村田式ライフル銃を持っている日本軍を相手に、このような装備の兵を何千人も送り出すのは殺人以外のなにものでもない。兵士もそれを知っていた。だからこそ西洋人を見ると「こいつら洋鬼子のせいでおれたちは撃たれにいくんだ」ということばが出てくるのであり、総督の宮殿に大群で押しかけて護衛から撃つぞと威嚇されたとき、「どうせ朝鮮で撃たれるのだから、ここで撃たれてもかまわない」と言い返したのである。［267～270］XI

清国兵が日本を「西洋人」と同一視していた事に注意したい。バードを驚かせたのは「兵士たちが好き勝手に列を離れる」［270］光景ばかりではなかった。兵士が武器を持っていたとしても銘柄がばらばらで、「地面の一角にあらゆる種類の薬包をごちゃごちゃに積み上げ、兵士たちがその中から自分の武器に合ったものを選ぶのであるが、中には九つも十も試してようやく自分のを探しあてると、不要の薬包を投げて山に戻す兵士もいる！」［270～271］医療施設も救急隊もなく「傷病兵は身ぐるみはいで置き去りにするのが清国の習慣」［271］であり、兵站部は無能かつ不正を働き、従って食糧が殆どないので兵士たちは勝手に物を盗み出す。統率のきかず荒々しい満州北部の兵士は「皇帝との関わりを笠に着ていて、騒乱時には天下御免の強盗団」となる［271］。奉天旅団は例外的に規律正しかったが、これが去った後は無秩序がはびこった。「漢族兵士と満州族兵士の間の嫌悪と嫉妬はいざ戦争というときの大きな障害となったばかりでなく、将校の身の安全を脅かしもいた」［272］。惨事の噂が飛び交い始め、奉天に動揺が広がる。物乞いや失業中のクーリーまでが入隊させられ、三週間の訓練の後に戦地に送られた。街の商業は麻痺し街路には人跡が絶え、西洋人は奉天を去った。バードが去ったのは 8 月 20 日であり、その後経由地として長崎とウラジオストクに滞在する。

（4）日清戦争中（1894 年秋）の長崎とウラジオストク　――経由地の見聞――

長崎での見聞で注目されるのは、戦時中でも清国人が在留登録さえすれば商売にいそしむ事ができた点である。対照的に清国では「日本領事の要請ですべての日本人が国外へ逃げだし、人身・物品の双方に危害を受け、はぐれた『倭人』が町で見つかろうものならまちがいなく殺されているはず」であった。他方、「長崎の官庁には慰問袋と金銭が連日殺到し、人々の話題は日本軍勝利のことばかりで、3000 人の収容の劇場では＜軍資金集め＞のために一日二回興行し、大勢の観客がつめかけている」［275］。バードは大阪でも慰問袋の積み重なる光景を見ているが［350］、昭和の戦争の原風景となるこの光景が日清戦争時に既にあった事が確認される[35]。ウラジオストクでは清国人経営の商店が繁盛する一方、全てに軍事色が染み込んでおり、その情景の活写は極東大軍港の威容を彷彿とさせる。

（5）日清戦争中の沿海州（ロシア・朝鮮国境付近）

バードはロシア領である沿海州で、朝鮮本国と違い、朝鮮人移民が非常に闊達で卑屈なところがなく勤労意欲に溢れている事に感銘を受ける。かねてよりバードは、朝鮮本国では貴族階級による搾取が民衆の勤労意欲を奪っている、と繰り返し指摘してきた。

・・・朝鮮の災いのもとの一つにこの両班つまり貴族という特権階級の存在がある。両班はみずからの生活のために働いてはならないものの、身内に生活を支えてもらうのは恥とはならず、妻がこっそりよその縫い物や洗濯をして生活を支えている場合も少なくない。両班は自分ではなにも持たない。・・・両班の学生は書斎から学校へ行くのに自分の本すら持たない。慣例上、この階級に属する者は旅行をするとき、大勢のお供をかき集められるだけかき集めて引き連れていくことになっている。本人は従僕に引かせた馬に乗るのであるが、伝統上、両班に求められるのは究極の無能さ加減である。従者たちは近くの住民を脅して飼っている鶏や卵を奪い、金を払わない。・・・［改行］非特権階級であり、年貢という重い負担をかけられているおびただしい数の民衆が、・・・両班から過酷な圧迫を受けているのは疑いない。商人なり農民なりがある程度の穴あき銭を貯めたという評判がたてば、両班か官吏が借金を求めにくる。これは実質的に徴税であり、もしも断ろうものなら、その男はにせの負債をでっちあげられて投獄され、本人または身内の者が要求額を支払うまで毎朝笞で打たれる。・・・しかし元金も利息も貸し主にはもどってこない。貴族は家や田畑を買う場合、その代価を支払わずにすませるのがごく一般的で、貴族に支払いを強制する高官などひとりもいないのである。・・・［137～138］XII

後に松都から平壌への途上でも「官庁のある町は例外なくほかよりすさんでいる」とし、「朝鮮の官僚は大衆の生き血をすする吸血鬼である。・・・政府官僚の大半は、どんな地位にいようが、ソウルで社交と遊興の生活を送り、地元での仕事は部下に任せている。しかも在任期間がとても短いので、任地の住民を搾取の対象としてとらえ、住民の生活向上については考えようとしない」［392］XIII と述べている。このような搾取の故に人々は働く事に著しく無気力なのだとバードは考える。例えば「朝鮮の漁民はどうせ何かと口実を設けて取り上げられてしまう金銭なら、儲けようという気にはならないのである。」［208］

しかし沿海州での朝鮮人移民の成功を目の当たりにしたバードは、やはり条件さえ整えば人は働くようになるのだと改めて確信した。

朝鮮にいたとき、わたしは朝鮮人というのは人種のかす（the dregs of a race）でその状態は望みなしと考えていた。ところが沿海州でその考えを大いに修正しなければならなくなった。みずからを裕福な農民層に育て上げ、ロシア人・・・から勤勉で品行方正だとすばらしい評価を受けている朝鮮人は、なにも例外的に勤勉家なのでも倹約家なのでもないのである。彼らは大半が飢饉から逃げだしてきた飢えた人々だった。そういった彼らの裕福さや品行のよさは、朝鮮本国においても真摯な行政と収入の保護さえあれば、人々は徐々にまっとうな人間となりうるのではないかという望みをわたしにいだかせる。［307］XIV

この部分には、日本の朝鮮政策へのバードの好意的な評価につながった要素が含まれている。バードの考えでは、搾取によって無気力に陥っていた朝鮮社会に必要な改革を行ったのは日本であり、ただその改革が必ずしも成功しなかったのは、日本が「未経験すぎた」からなのであった。後に徳川から平壌への旅を記す部分でバードは述べている。

気候はすばらしく、雨量は適度に多く、土壌は肥え、内乱と盗賊団は少ないとくれば、朝鮮人はかなり裕福で幸せな国民であってもおかしくない。もしも「搾取」が・・・強力な手で阻止されたなら、そしてもし地租が公正に課されて徴収され、法が・・・民衆を保護するものとなったなら、朝鮮の農民はまちがいなく日本の農民に負けず劣らず勤勉で幸せになれるはずなのである。・・・勤勉に働けば利益の得られることが保証されれば、無気力無関心な人々も変身するはずである。そのための改革は日本によって行われてきたが、日本も自由裁量権があ

たえられているわけではなく、また改革に着手した（とわたしは心から信じる）ものの、役割を果たし調和のとれた改革案を立てるには未経験すぎた。・・・改革は断続的断片的で、日本は枝葉末節にこだわって人々をいらだたせ、自国の慣習による干渉をほのめかしたので、朝鮮を属国にするのが目的だという印象を、わたしの見るかぎり朝鮮全土に与えてしまった。［改行］旅行者は朝鮮人が怠惰であるのに驚くが、わたしはロシア領満州にいる朝鮮人のエネルギーと勤勉さ、堅実さ、そして快適な・・・彼らの住まいを見て以来、朝鮮人のなまけ癖を気質と見なすのは大いに疑問だと考えている。朝鮮中の誰もが貧しさは自分の最良の防衛手段であり、自分とその家族の衣食をまかなう以上のものを持てば、貪欲で腐敗した官僚に奪われてしまうことを知っているのである。・・・［432～433］XV

（6）日清戦争中の朝鮮における日本の行動

①日清戦争の代償　――日本軍の大量の戦死者――

ウラジオストクを発ったバードは元山で、朝鮮人が戦時中に日本人の払った労賃で裕福になった事を観察した。しかし注目されるのは日本軍の戦死者についての記述である。「戦時中は 1 万 2000 人の日本兵が元山経由で平壌に向かったのである。次にわたしが上陸した釜山には 200 人の日本兵がいて、・・・丘の上にある軍墓地に立つおびただしい墓碑は、大量の日本兵が死んだことを示していた」。済物浦でも「以前あれほど目についた軍隊色は、わずかな兵士と 10 棟ある仮設病院の大きな小屋、そして込んだ墓地に様変わりしていた。墓地には日本軍の戦死者が 60 列になって眠り、それぞれ木の墓碑が立っていた」［319］XVI。第 21 章の＜済物浦の日本軍墓地＞という写真には整然と並んだ夥しい墓が写っており、一番手前の墓には「歩兵第十一聯隊・・・」「陸軍歩兵二等卒　大久保［某］」とある。無名の兵士が朝鮮で大量に犠牲になった明治日本の影の側面の鮮烈な提示である。

バードは 1895 年 2 月 5 日に済物浦を再訪するが、戦争で便が狂っていた日本汽船を待つ間に威海衛陥落のニュースを聞く。「わたしは日本郵船の事務所にいたが、係の事務員は仕事も手につかないはしゃぎぶりで『何しろまた勝ったものですから！』とわたしに謝った。済物浦は飾りとあかりをつけ、勝利を祝う行列が練り歩いた。李鴻章の人形が燃やされ、通りの角々に置かれた樽からあらゆる人に酒がふるまわれた」［349］XVII。戦勝の熱狂から目を転じて、バードは日本の「勝利の代償」を冷静に見つめる。「大規模な軍病院は満員で、墓地はどんどん埋まってきており、宮司をともなった仰々しい軍の葬列が旗を掲げた街路を通っていく。満州からとぼとぼと帰ってきた 600 人の従軍人夫がぼろを着た姿で到着する。なかにはなめしていない皮や羊の毛皮を着た者もいて、手足や唇は凍傷に冒され、黒ずんだ指の先が汚い包帯から突きでていた[36]」［349］XVIII。

続くバードの説明は、日本の近代戦と国民の熱狂の原型としての日清戦争の性格を照射する同時代証言にほかならない。「日本人は学校で、国から求められれば、すべてをなげうつべきである、国の祭壇に捧げるためなら命も惜しくないと教えられている。その教育が実を結んでいることに疑問の余地はない。しばらく前にわたしは大阪で埠頭に慰問袋が高く積み上げられているのや、かつて見たことがないほど熱狂する群衆に送られて第三軍が出発するのを目にしたことがある。前述の従軍人夫の大半も新しい衣服をもらうとさらなる役務に就くことを志願する。そして戦場や病院で死んでいく兵

士は、最後の息をふりしぼって『大日本ばんざい！』と発するのである」［349～350］XIX。

②朝鮮王室への圧迫（1895 年 1 月）

1895 年 1～2 月のソウル滞在中についてバードは、日本はソウルに大守備隊をおき、井上馨（朝鮮公使、在勤 1894～1895 年）の「断固とした態度と臨機応変の才」［322］のために表面上は万事円滑に進んでいた、と記している。1 月 8 日バードは「異例の式典」を目にする。「朝鮮に独立というプレゼントを贈った日本は、清への従属関係を正式かつ公に破棄せよと朝鮮国王に迫っていた。官僚腐敗という積年の弊害を一掃した彼らは国王に対し、＜土地の神の祭壇＞［社稷壇］前においてその破棄宣言を準正式に執り行って朝鮮の独立を宣言し、さらに提案された国政改革を行うと宗廟前において誓えと要求したのである」（322）XX。「小事を誇張して考える傾向のある国王」はこの式典を延期していたが、「井上伯爵の気迫」に負けて国王は「朝鮮で最も聖なる祭壇」で王族と政府高官列席の下に誓いの儀式を行った。臨場感あふれる描写の中で注目されるのは甲申事変の首謀者の一人、朴泳孝内務大臣 (37) が日本人警官に警護されながら列に加わっていた光景と、大衆の沈黙であろう。「・・・この印象的な光景を眺めていた白服の群衆のあいだには、笑みもなければ発されることばもなかった」［323］。「一般大衆はことばも動きもなくたたずんでいた」［324］。しかしバード自身は、その後朝鮮の改革が日本の定めた方針に沿っている事を念頭におくべきであるとし、井上馨に対しても好意的な評価を下している［327～328］。考察は後篇に譲りたい。

③国王夫妻との会見（1895 年 1～2 月）

王妃からの内々の招待で、王妃の侍医アンダーウッド夫人と共に王宮を訪れたバードの記述 (38) は、美しく知性的な王妃の冷徹な面、温厚篤実な国王の優柔不断さという、人の持つ光と影の卓越した描写であり、夫妻の人間像に迫る貴重な証言でもある。

王妃はそのとき四〇歳をすぎていたが、ほっそりしたとてもきれいな女性で、つややかな漆黒の髪にとても白い肌をしており、真珠の粉を使っているので肌の白さがいっそう際立っていた。そのまなざしは冷たくて鋭く、概して表情は聡明な人のそれであった。［王妃の美しい衣装の描写、中略］話しはじめると、興味のある会話の場合はとくに、王妃の顔は輝き、かぎりなく美しさに近いものを帯びた。

国王は背が低くて顔色が悪く、たしかに平凡な人で、薄い口ひげと皇帝ひげを蓄えていた。落ち着きがなく、両手をしきりにひきつらせていたが、その居ずまいやものごしに威厳がないというのではない。国王の面立ちは愛想がよく、その生来の人の好さはよく知られるところである。会話の途中、国王がことばにつまると王妃がよく助け船を出していた。［中略］皇太子は肥満体で、あいにく強度の近視であるのに作法上眼鏡をかけることが許されず、その時はわたしに限らずだれの目にも完全に身体障害者であるという印象をあたえていた。彼はひとり息子で母親に溺愛されていた。王妃は皇太子の健康についてたえず気をもみ、側室の息子が王位後継者に選ばれるのではないかという不安に日々さらされていた。頻繁に呪術師を呼んだり、仏教寺院への寄付を増やしつづけたりといった王妃の節操を欠いた行為の中には、そこに起因したものもあったにちがいない。謁見中の大部分を母と息子は手をとり合ってすわっていた。［330～332］XXI

四度の会見を許されたバードは、王室の内情にも洞察を加えている。

・・・どのときもわたしは王妃の優雅さと魅力的なものごしや配慮のこもったやさしさ、卓越した知性と気迫、そして通訳を介しても充分に伝わってくる話術の非凡な才に感服した。その政治的な影響力がなみはずれて強いことや、国王に対しても強い影響力を行使していること、などなどは驚くまでもなかった。王妃は敵に囲まれていた。国王の父大院君を主とする敵対者たちはみな、政府要職のほぼすべてに自分の一族を就けてしまった王妃の才覚と権勢に苦々しい思いをつのらせている。王妃は毎日が闘いの日々を送っていた。魅力と鋭い洞察力と知恵のすべてを動員して、権力を得るべく、夫と息子の尊厳と安全を守るべく、大院君を失墜させるべく闘っていた。多くの命を粛清してきたとはいえ、そのために朝鮮の伝統と慣習を破るということはなく、また粛清の口実として、国王の即位直後に大院君が・・・王妃の母、弟、甥をはじめ数名の人間を殺害したという事実がある。その事件以来大院君は王妃自身の命をねらっており、ふたりのあいだの確執は白熱の一途をたどっていた。

王家内部は分裂し、国王は心やさしく温和である分性格が弱く、人の言いなりだった。そしてその傾向は王妃の影響力が強まって以来ますます激しくなっていた。わたしは国王が心底ではその知力と相応に愛国的な君主であると信じている。国王は国政改革にもむしろ乗り気で、申しだされる提案のほとんどを承認してきている。しかし不幸にも、また国にとってはさらに不幸にも、その声明が国の法となる立場の人間にしては、彼はあまりにも人の言いなりになりすぎ、気骨と目的意識に欠けていた。最良の改革案なのに国王の意志が薄弱なために頓挫してしまったものは多い。絶対王政が立憲政治に変われば事態は大いに改善されようが、・・・外国のイニシアチヴの下に行われない限り成功は望むべくもない。［334～335］XXII

バードは「鉄のはらわたと石の心」を持つ大院君の血に染まった足跡についても記し、「摂政時代が終わってから王妃暗殺まで、朝鮮政治史はおもに王妃及びその一族と大院君の激しい確執の歴史であった」［335～336］と説明する。バードは大院君に拝謁した際、「その表情から感じられる精気、その鋭い眼光、そして高齢であるにもかかわらず力強いその所作に感銘を受けた」［336］。対照的に国王は温和であり、「すばらしい知性」を持ち、キリスト教伝道団に対しても寛容であり、国民も王室に「情愛のこもった忠誠心」を抱いて圧政の責任は大臣にあるとしているのではないか、と述べる。しかしバードは国王が「愚にもつかない人々の意見に簡単に流されるところがなければ、名君になりえたであろうに、その意志薄弱な性格は致命的である」［338］と指摘する事も忘れない。国王が立憲君主制についてバードが当惑するほど多くの質問をしたとも記している［339］。

バードにとって、1895 年 2 月の拝謁が王妃との今生の別れとなった。「朝鮮国王に招かれた旅行者は往々にして謁見や周囲のようすや宮殿をあざ笑う。わたしはわが国とは異なった国の習慣や礼儀作法が必ずしも嘲笑には値しないかぎり、あざ笑うべきものは何一つ目にしなかったと言わねばならない。むしろ反対にあったのは、簡素さ、威厳、親切心、丁重さ、そしてたしなみのよさであり、こういったものはわたしにとても快い印象を残している」［341］XXIII　――19 世紀という時代にあって、西洋「文明国」の人間が非西洋「後進国」の異質な文化に接した時に持ち得る、最大限の誠実さと礼節をこの言に感じるのは、私一人ではないだろう。

④日本が朝鮮に要求した国政改革の過渡期の混沌（1895 年 1 月）

この時期の朝鮮政府に対する日本側の圧迫の実態をバードは次のように描いている。

1895 年 1 月、ソウルは奇妙な状態にあった。「旧秩序」が変わりつつあるのに、新しい秩序は生まれていなかった。陸海戦共に勝利を得た日本は、戦前清に協力を要請していた国政改革を朝鮮に強要する態勢にあった。1894

年 7 月に日本軍が王宮を占拠して以来、国王は「俸給をもらうロボット」にすぎず、またかつて権勢を誇った閔一族は官職から追放されていた。日本は全省庁の監督責務を引き受け、腐敗した行政官に公正を強いる構えでいた。1894 年 9 月 17 日、平壌で清国軍を敗退させた日本に、目的実行を阻むものは何もなかった。明治維新の功労者のひとり、井上伯爵が 1894 年 10 月 20 日「駐在」公使として到着し、国王の名を着せた政府を実質的に運営した。内閣の各省に日本人の顧問官がおり、軍隊は日本人教官に訓練され、警官隊が組織されて不似合いな日本の制服を着せられた。・・・井上伯は日本人顧問として国王と常時面会できる資格を有し、閣議の際には通訳官と速記官を従えて同席した。日本が優位にある事は、毎日のように行われる新しい人事、規則の改正を見れば明らかだった。日本人はかつてイギリスがエジプトに対して行ったように、朝鮮の国政を改革するのが自分たちの目的であると主張した。・・・［342］ XXIV

バードは日本によるこのような国政「改革」は難航しているとし、理由を二点挙げる。まず朝鮮側の事情であり、「・・・名誉と高潔の伝統は、あったとしてももう何世紀も前に忘れられている。公正な官吏の規範は存在しない。日本が改革に着手したとき、朝鮮には階層が二つしかなかった。盗む側と盗まれる側である。そして盗む側には官界をなす膨大な数の人間が含まれる。『搾取』と着服は上層部から下級官吏にいたるまで全体を通じての習わしであり、どの職位も売買の対象となっていた」［344］ XXV。第二には日本側のやり方の問題であり、王宮占拠は「たとえ政治上必要だった――真意は計りかねるが――としても、君主の尊厳を損ねたことに弁解の余地はない。かつて陰謀を働いた者を高官の地位にむりやり就けたのは重大な過ち」 XXVI であり、社会風習への干渉など柔軟性のないやり方も人々の反感を買ったという［345］。王宮占拠への批判 (39) に再び注目しておきたい。

バード自身は日本が改革に「徹頭徹尾誠実」であった［350］とするが、バードが記す事実関係は、日清戦争が終結する前に既に、朝鮮の王室の尊厳を侵しながら独立国家としての統治権そのものを日本が奪いつつあった過程の克明な記録にもなっている（特に下線部）。

（7）閔妃暗殺

日清戦争は終結した。「1895 年 5 月、下関で清日間に講和条約が締結された。日本は多額の賠償金と台湾を得てその威信はますます増大し、以後、極東に関心を持つ列強は日本を小国としてあなどれなくなった」［351］ XXVII。1895 年 10 月に長崎で閔妃暗殺の噂を聞いた後、バードはソウルに戻る。日本の朝鮮公使は「つねに頼もしき存在であった井上伯」から「有能な軍人ではあったが、外交経験はなかった」［351］三浦梧楼（朝鮮公使、在勤 1895 年）(40) に交代していた。

バードは閔妃が暗殺された 1895 年 10 月 8 日の夜を再現する。まず暗殺事件の関係者を裁いた広島地方裁判所の判決をもとに「三浦梧楼の教唆」から日本人の後宮乱入までを再現し、「王宮に入り次第『狐』［王妃のこと］を『臨機に応じて』処分」せよという指示があった事［352］に言及する。しかし後宮乱入後については、判決はどの被告の場合も「証拠不充分」で終わっているため、バードは侍衛隊教官ダイ将軍及びロシア人技師サバチンの陳述と、数種の公式文書(41)から再現を試みる［353］。

ここでは長い叙述の一部のみを提示する。「抜刀した日本の民間人が王妃はどこかと必死の形相で叫びながら、側室の髪をつかまえて引きまわし、王妃の居所を言えと強要した。彼らは窓を蹴破って

出入りし、高さが七フィートあるベランダから女官を地面に突き落とし、蹴るわ切りつけるわの乱暴を働いたあげく、王妃を守ろうとした女官二人をそうやって残忍にも殺してしまった」［355］。王妃の殺害そのものについては、

暗殺団から逃げだした王妃は追いつかれてよろめき、絶命したかのように倒れた。が、ある報告書は、そこでやや回復し、溺愛する皇太子の安否を尋ねたところへ日本人が飛びかかり、繰り返し胸に剣を突き刺したとしている。そのとき、前にわたしも会ったことのある乳母が王妃に覆いかぶさり、そのため顔が見えなかったとはいえ、王妃が絶命していたかどうかははなはだ疑問である。それなのに日本人暴徒は王妃を板の上に載せ、絹のふとんをかけて隣の鹿園にある松林へと運んだ。そして王妃のまわりに粗朶を置き、灯油をそそいで焼いた。あとには小さな骨が数片しか残らなかった。［356］XXVIII

バードは王妃と心を通わせた人間としてその死を悼む。「このように聡明で野心家で魅力にあふれ、愛すべきところの多かった朝鮮王妃は、近しい一国の公使から卑劣な行為をそそのかされた外国人暗殺団の手により、四四歳で命を落としてしまったのである」［356］XXIX。またバードは王妃と友誼を結んだ他の外国人女性も王妃の死を身近に受け止め、「悲嘆はあまりにも切実で」宴会も自粛され、「王妃が政治の場で見せた東洋特有の非人道的な性質は、その死にまつわる惨劇が恐怖の戦慄を引き起こしたために忘れられた」［363］とも述べている。殺害の残忍さに「追い打ちをかけて王妃を貶める」［358］日本側の行動もバードは書き留める。事件から三日後、王妃が「邪悪の極み」であるにつき「王妃の身分を剥奪し、庶人に格下げする」という詔勅、その翌日には皇太子の胸中を察して国王は前王妃を「第一側室」に「格上げ」するという布告、更に 10 月 15 日には妃選びに入るとの「勅令」に国王は署名を迫られたのである［359～360、362］(42)。「極度に緊迫した状況」の中で各国公使は日本公使館で三浦から事情説明を聞き、事態を憂慮して何度も協議したが、「三浦子爵は事件に関していたのか否か」が翌日にも浮かび上がった疑問であったとバードは記す。「三浦の教唆により王妃殺害を決意」した二名が仲間に対して王妃殺害の指揮をとったとされたが（広島地裁判決）、証拠不充分で全員が無罪となったこの事件に対するバードの態度は、殺害に関与した日本人と日本政府を区別するという最大限に好意的なものであった。「日本にとって東洋の先進国たる地位と威信とをこれほど傷つけられた事件はなく、日本国政府には同情の余地がある。というのも事件関与を否定したところで忘れられ、王妃殺害の陰謀が日本公使館で企まれたこと、銃と剣で武装して王宮襲撃に直接関わった私服の日本人の中には朝鮮政府顧問官が数名いたこと、そのほかにも・・・日本公使館と関係のある日本人警察官や壮士と呼ばれる者も含めて総勢 60 名の日本人が含まれていたことが、いつまでも人々の記憶に残るからである」［361～362］XXX。ここでバードが心情的には殺害に関与した日本人と日本政府を区別しようとしながら、客観的には両者を区別しがたくしている状況の存在を指摘している事に注目したい (43)。

三浦の後任は「実績があり礼節をわきまえた」［567］小村寿太郎（朝鮮公使、在勤 1895～1896 年）であったが、国王は皇太子と共に幽閉状態となる。「内閣はおもに謀叛の徒の手先となった一派で構

成され、国王にとっては看守同然で、王妃を危めたその血も乾かぬ手で虫酸の走る布告文に玉璽を押せと迫る[44]」［362］。外国公使たちは国王を交代で訪ね、同情の意を表して励ました。暗殺からほぼ一か月後、各国公使たちが井上伯に訓練隊の武装解除と日本軍が王宮に入るよう勧めた事をバードは記し、「日本政府がいかに列強外交代表者から非難を受けていなかったかが、この提案からわかろう」［364］としているが、この見方については留保したい。井上が日本軍による王宮占拠の提案は紛糾を生ずると判断して「即答を避け」、結局「井上伯と新任公使の小村氏がふたりして働きかけたにもかかわらず」日本は王宮を占拠しなかったとバードは説明し、日本の干渉を最も強く勧めたのはロシア公使［ヴェーベル］であったため、後の展開から考えると、この提案を受け入れていれば後々ロシアの干渉を許す結果にならなかったのではないかと述べている。暗殺の下手人たる日本人集団と日本政府を峻別していなければ出て来ない、日本「政府」に共感的なコメントと言えよう[45]。

（8）日清戦争が朝鮮に残した傷跡　――北部への旅――

ソウルを発って高陽に着く。「ここをはじめ平壌までのどの郡庁所在地でも、20 人から 30 人の日本兵が庁舎に寝起きしていた。住民たちは三世紀前の遺産である憎しみから日本兵を嫌っているが、彼らに対しては何も言えないでいる。日本兵がきちんと金を払ってものを買い、だれにも危害を加えず、庁舎の門外にはめったに出てこないことを知っているからである」［371］XXXI[46]。道中、日本兵に国籍や行き先の質問を受けた。「たいがいとても丁重だったとはいえ、質問のしかたは、こちらには当然その権利がある、この国の支配権はいったい誰にあると思っているのだといわんばかりだった」［392～393］XXXII。

貨幣価値の著しい低下や、労働と収入が結び付かないなどの事情で「交易」が大半の地域で成立していない朝鮮にも日本の銀貨が入ってきており、現地の穴あき銭を大量に運ばなくてもどの宿屋でも日本の銀貨だけは受け取ってくれた、とバードは記している［394］。

平壌に着く二日前、バードは黄州で日清戦争による破壊の跡を初めて目の当たりにした。

・・・日本軍が清国軍を襲撃した場所ではあるが、ここでは戦闘は何もなかった。それでも推定三万の人口を擁して栄えた町が、5000 人から 6000 人ほどの住民数に減り、あらゆるものが壊されてしまったのである。［改行］＜水門＞をくぐると、中はひどいありさまだった。瓦礫の山があちこちにあり、黒こげになったものもあれば、「いきなり」崩壊したとおぼしい建物の残骸からは柱や梁がつき出ている。崩壊は広範囲にわたり、無人の家々が立ち並ぶ通りはさらに痛ましいことに、戸や窓が野営した日本軍のたき火となって消え、通りには屋根のない土壁だけが立っていた。中にはあたり一帯の家々の窓がなく、はがれた壁紙がひらひらと揺れているところもあり、まわりが破壊されたり無人になった中で、人の住んでいるらしい家が一軒ぽつんと残っているのは、いっそうわびしく見えた。破壊のうち一部は清国軍もしくは日本軍がもたらしたものではあるが、大部分は恐怖におののいた二万人以上の住民が町を捨てたためにこうなってしまったものである。［改行］・・・［黄州の北の］この平野にある村々は焼かれたり捨てられたりで廃墟となっており、せっかくの沃土も耕作者が逃げ出したせいで荒れてしまい、家畜は全くいなかった。・・・［改行］その日の旅は半壊の村々や、原野にもどってしまった農地や、燃えるものはすべて取りつくしたはげ山を通るという重苦しいものだった。道を行く旅人と出会うこともなければ、動きらしいものも一切ない。・・・［398～399］XXXIII

アメリカ人宣教師モフェットの案内を受けたバードは、平壌の荒廃に言葉を失う。

絶好の晴天のもとでは何もかもが最高に見え、また最悪にも見える。というのも明るい陽光が照らし出す荒廃ぶりは目をそむけたくなるほどで、人口六万のはなやかな都が衰退し、1 万 5000 戸つまり五分の四の人家が破壊されたのである。大通りや路地は瓦礫でふさがれ、かつて朝鮮家屋が立ち並んでいた丘の斜面や谷間は・・・瓦礫の山で覆われ、さらにひどいことには屋根や壁が無事に残っていても、戸や窓の建具をきれいに奪われた家屋は、恐怖に襲われて大きく目を見開いた人の顔を連想させる。どこへ行っても同じような光景が何マイルにもわたって続き、その大部分は焼けて黒ずみ、醜くまた絶望的で、まぶしい日ざしはそれをあざ笑っているかのようだった。［改行］平壌は猛襲を受けたわけではない。市内では実際の戦闘はなく、敗退した清国軍も占領した日本軍も朝鮮を友邦として扱っていた。この荒廃のすべてをもたらしたのは、敵ではなく、朝鮮を独立させ改革しようと戦った人々なのである。「倭人（矮人）は朝鮮人を殺さない」ことが徐々に知られるようになり、多くの住民はもどってきていた。逃亡したこれらの運が悪く哀れな住民の中には、瓦礫の山の中から、かつて自分の家があった場所を示す手がかりを探しだすことから始めねばならない者もあった。・・・［改行］日本軍が入ってきて、住民の大部分が逃げ出したのを知ると、兵士は家屋の木造部を引きはがした。往々にして屋根も燃料やあかりに使った。そして床で燃やした火を消さずに去るので、家屋は焼失した。彼らは避難民が置いていった物品を戦闘後三週間で略奪し、モフェット氏宅ですら 700 ドルに相当するものが盗まれた。・・・略奪は将校も現場にいて容認されていた。このようにして朝鮮で最も栄えた都の富は消えてしまったのである。・・・［402～404］XXXIV

日本軍の掠奪も占領中はやみ、物資に対して「順当な代金が支払われた」。「日本兵を激しく嫌ってはいても、人々は平穏と秩序が守られていることを認めざるを得ず、また、日本軍が引き上げれば、訓練隊［日本人の訓練を受けた朝鮮人の連隊］がのさばることもよくわかっていた」［404］XXXV。バードは平壌大会戦で戦死した左将軍の遺族のために将軍終焉の地を写真に収める。終焉と思しき地点には日本人の手になる端正な碑があり、「奉天師団総司令官左宝貴ここに死す」「平壌にて日本軍と戦うも戦死」［407］と記されていた。「敵軍の名将に捧げた品位ある賛辞」(47) であるが、奉天旅団の最期は壮絶そのものであった。

その夜の惨事の詳細についてはだれにも永久にわかるまい。平壌での戦闘は砦を破られた時点で勝負がついたのであり、その後に起きたのは戦闘というより殺戮だった。夜が明けるまでに、統率力と装備で清国軍の花形だったこの部隊は消失した。敗残兵を集めて再編成されることもなかった。戦死者は 2000 名から 4000 名と推定され、また何千頭もの牛馬が死んだ。この騎兵隊は文字通り大量殺戮を受け、人馬は「山と」積み重なった。日本軍は平野を放火の輪で取り囲んだのである。三週間のちに現地へ戻ったモフェット氏は、それだけの日にちがたっていても「形容しがたいすさまじさ」だったとその光景を語った。多くが自分の上に積み重なった重みから抜け出ようとして果たせず、死のあがきもそのままに硬直した人馬の「山」は依然そこにあったのである。北京街道には黒ずんだ死体が何百となく転がり、水路は人と牛馬のかばねで満ち、原にはそれが散らばり、ライフル銃、マスケット銃、・・・など死に物狂いの逃亡で捨てられるかぎりのあらゆるものが地面に放り出されていた。数多くの負傷兵が無人の家に入りこんでそこで絶命し、中には苦悶から自殺した形跡のある死体もあった。そして暑い日ざしのもとで黒ずみ腐敗していく大量の亡骸を飼い主から捨てられた犬がむさぼった。わたしが戦場跡を歩いた時でさえ、その跡には穀物が実ってはいても、頭蓋骨、肋骨や骨盤のついた脊柱、手足の骨、帽子、ベルト、剣の鞘が残っていた。［408～409］XXXVI

清国兵の死体を放置したために発疹チフスが流行し、日本軍に多くの犠牲者を出した事は済物浦の日本軍墓地にある墓碑の長い列から推測できる、とバードは記している［409］。激戦地となった箕子

の陵廟には、無数の弾痕と日本兵の血の大きな黒いしみが残っていた。

バードはいまだに人骨の散らばっている野営地跡を通り、戦禍を免れた道を通って北部へと進む。徳川まで行って平壌へ向かって折り返した道の途上にあるさびれた町、慈山で、バードは人々から「清国兵は情け容赦なくものを盗む、ほしいものは金も払わずに奪い、女性に乱暴を働くという悲痛な被害の話」［441］を聞いた。日本人に対しては慈山では他と同様、人々は「一人残らず殺してしまいたいというほど激しい反感を示していたが、やはりほかのどこでもそうであるように、日本兵の品行のよさと兵站部に物資をおさめればきちんと支払いがあることについてはしぶしぶながらも認めていた」［441］XXXVII。以下は、バードがこの地で目撃した日本兵の様子である。「日本軍の派遣隊がこの街道沿いの駐屯地から引き上げつつあり、いつも赤い毛布を積んだ牛を先頭にした装備のいい兵隊とわたしたちも何度か出会った。兵士たちは衿に毛布のついた灰色の重そうな防寒コートを着て、とても厚いフェルトの手袋をはめていた。まるで観兵式さながらに行進し、将校たちは実に颯爽としていた」［441～442］。

日清戦争が朝鮮人住民に精神的な傷跡をも残した事を、バードの記述は後世に伝える。戦前は伝道活動が失敗していた平壌近郊では、戦後キリスト教信者の明らかな増大が見られた。また平壌でバードにつきまとった上流風の「狂女」は、「前平壌府行政長官の愛人で、戦時中平壌にとどまっており、清国兵が日本兵の銃剣に刺し殺されるのを見たショックから狂ってしまったのである。長い千枚通しを持っており、凶行におよぶ兵士の悲しいまねをいやというほどしてみせたものだった！」［449］

（9）日清戦争後の朝鮮内政と日本の後退（1896 年）

日清戦争直後、「・・・日本の影響力は傾いていた。日本軍は駐屯地からしだいに撤退し、朝鮮政府各省の日本人顧問や検査官は雇用契約が切れても更新されず、日本が支配的立場にあったときに実施した改革も一部は自然消滅してしまい、時勢ははっきり退行を示していた。行政機関は全土で崩壊しつつあった」［459］XXXVIII。1895 年 12 月 30 日に出された断髪令への反対の暴動は「日本人への敵意を公然と表しており、殺人に至った場合が多い」［464］。

1896 年 2 月 11 日には国王が王宮から脱出してロシア公使館に移り、断髪令など過去半年間に発布された勅令の大半を撤回し、ロシアが影響力を持つようになった事をバードは記し、日本が主導した国政「改革」を振り返る。国王の地位を清国の皇帝並みに引き上げる（清国との宗属関係の破棄）、国王は内閣の助言を受けて統治するなどの例に触れながら、日本の「改革」が 1894 年 7 月の王宮占拠に始まったと指摘し、「日本は朝鮮式機構の・・・・悪弊と取り組み、是正しようとした。日本人が朝鮮の政治形態を日本のそれに同化させることを念頭においていたのは当然であり、それはとがめられるべきことではない」［474］、「改革された体制は多くの面で・・・旧体制を大いに改善した」［488］XXXIX と日本主導の改革を評価する。また日清戦争後の顕著な変化として、歴代朝鮮国王が王権を付与しに来た清皇帝の勅使を迎えた牌楼が撤去され、バードの滞在中に大勢の参列者の下、1895 年 1 月に宣言された独立を記念する門の基礎が同じ場所に据えられたと記す。清国からの「独立」が正に

日本への従属を意味していた事を考えると、それは矛盾に満ちた光景であったはずだが、その矛盾にバードは立ち入らない[48]。

（10）バードの結論　――1897 年から見た日清戦争の意味――

バードの結論の一つは、それまでも彼女が繰り返してきたように、「公認の吸血鬼」［558］である官僚の搾取が勤労意欲を奪っている朝鮮社会の改革は外部からでなくてはならないというものであった。もう一つの重要な結論としてバードは 1897 年から見た日清戦争の評価と位置づけを行っている。

バードは、日清戦争と日本の支配期が朝鮮全土に唐突な動揺を与え、伝統的な慣習や制度を徹底的に失墜させたため、1897 年に見られる日本の影響力の後退にもかかわらず朝鮮を元の姿に戻すのは不可能だと述べる。日清戦争は朝鮮の「庶民にも権利はあり」、「法的見地から見た平等に値し」、収入を守られるべき存在だということに気付かせたのであった［560～561］。

バードは三年間（1894～1897）で朝鮮に起こった「有益な変化のうち重要性の高いもの」をまとめている。まず、日清戦争における日本の勝利と共に中国の軍事力は無敵であるという朝鮮の思い込みが打破され、朝鮮と清国の同盟関係が断ち切られたこと。貴族と平民などの身分差別が廃止されたこと。その他、残忍な処罰の廃止、使いやすい貨幣の流通、教育制度の改善、地租の変革により官僚の搾取が大幅に減ったことなどである［561］。バードは「日本から独立というプレゼントをもらったものの、その使い方を知らずにいる」［571］朝鮮人の明るい将来のための条件として「I 朝鮮にはその内部から自らを改革する能力がないので、外部から改革されねばならない」「II 国王権限の権限は・・・憲法上の抑制を受けねばならない」の二点を挙げた［563］XL。I は今日から見れば論議を呼ぶ点であろう。

注目されるのは日清戦争の原因についての見方である。バードは日本が戦争を起こした表向きの理由と、本当の目的の乖離は明らかだと指摘する。

戦争を起こした表向きの理由は、日本政府は慎重を期してそれに固執しているが、日本にとって一衣帯水の国が失政と破滅の深みへ年々沈んでいくのを黙って見過ごすわけにはいかない、国政の改革が絶対に必要であるというものだった。日本がこの例外的な責務を引き受けたその最終目的はどこにあるか、それを憶測する必要はない。日本がたいへんなエネルギーをもって改革事業に取りかかったこと、そして新体制を導入すべく日本が主張した提案は・・・身分社会に大変革を起こし、国王の地位を「給料をもらうロボット」に落ちぶれされたものの、日本が並々ならぬ能力を発揮して編み出した要求は、簡単で自然な行政改革の体裁を示していたことを指摘すれば事足りる。［564］XLI

裏の意図が日本にはあったと示唆するわけだが、それにもかかわらず「わたしは日本が徹頭徹尾誠意をもって奮闘したと信じる。経験が未熟で、往々にして荒っぽく、臨機応変の才に欠けたため買わなくともいい反感を買ってしまったとはいえ、日本には朝鮮を隷属させる意図はさらさらなく、朝鮮の保護者としての、自立の保証人としての役割を果たそうとしたのだと信じる」［564～565］XLII と述べるのである。バードの矛盾したこの記述は、朝鮮社会の腐敗を改善したという功績を日本に帰し、

高く評価している故であろう。ところが「三浦子爵の残忍なクーデタが起き、日本は文明諸国に対して国家と外交能力への信用を失ってしまった」。続いて日本は駐屯隊を引き上げさせるなど外見上「身を引いた」が、それは「賢明で野心的な帝国」が本当に朝鮮を諦めたわけではないのだとバードは指摘する［565］。なぜなら日清戦争は「突発的な衝動の結果」［565］ではなく、数世紀にわたる計画の一端だったからであった。

日本は数世紀前から自国を朝鮮において商業面で支配的立場につく権利があると見なしてきた。日本の漁民は朝鮮の領海で漁をしてきたし、300 年前から釜山にある日本人居留地はそれなりに順調に維持されてきた。朝鮮における中国の権利に対するうらみは、最初は徳川幕府の鎖国政策によって、次には明治維新後の国内政治形態を強化する必要から、相当な期間積極的行動に出ることはなかったとはいえ、決して消えてはいなかったのである。［改行］清から・・・宗主権を奪う。商業における日本の支配権を強化する。日本人が自由に行き来できるようにし、特権を得る。他の外国の支配を許さない、実効ある保護権を確立する。日本の路線で朝鮮を改革する。朝鮮半島に古くから続いてきた東洋的伝統主義に代え、日本独自の・・・文明を導入する。こういったことが以前数世紀にわたってあった計画をいくぶん修正し、この 40 年間着実に視野におかれた目標だった。［565～566］XLIII

近世日本の朝鮮観と日清戦争に思想的連続性があるという指摘は、近世の史料 (49) に照らすと荒唐無稽な説とは言えない。また日本の朝鮮政策が明治維新の重要な指導者によって一貫して具体化されているという指摘は重要である。だからこそ「三浦子爵主謀による朝鮮王妃暗殺」後、日本は「一時的な撤退」を「極めて巧みに」行ったのだが、それをもって「日本は利権要求を諦めたのだとか、朝鮮の・・・保護を行う決意を翻したのだとか推論しては、大きな間違い」なのである［566～567］。一旅行者の、目先の展開にとらわれず本流を捉える透徹した史眼に驚かされるのは私だけではないだろう。

1897 年に擱筆するにあたって、バードは日露戦争を予見したように見える。

ことあるたびに、ロシアは朝鮮で支配的立場に着けるチャンスを見逃してきた。そんな立場になど着きたくもないというのが本当のところのようである。私達にはうかがい知れないが、ほかに狙いがあってそれと両立しないのかも知れない。同時に、日本の影響力は静かにまた着実に増大している。たしかに三国が下関講和条約に干渉した大きな目的は、日本が大陸進出の足がかりを得るのを阻止することにあったが、日本が待機戦術をとって・・・商業と移民というあくまで実利的な目的のために大陸の一地域を自国の領土に加えることは、必ずしもあり得ないとは思えない。予断は危険であるが、次のことは言える。もしもロシアが・・・朝鮮に関して何らかの積極的な意図を明示するつもりであるとすれば、日本にはその車輪にブレーキをかけるくらいの力は充分備わっている！　とはいえ、朝鮮が独り立ちをするのは無理で、共同保護というような極めて難しい解決策でもとられない限り、日本とロシアのいずれかの保護下に置かれなければならない。［568～569］XLIV

朝鮮への思いが当初の嫌悪感から「愛情に近い関心」へと変わったバードは、「朝鮮の運命をめぐってロシアと日本が対峙したままの状態で本稿を閉じるのは実に残念な思いである」［571］と結ばざるを得なかった。

結びに代えて　――前篇の暫定的な結論――

『朝鮮紀行』は、日清戦争がその前後の時期を含めて朝鮮に与えた甚大な影響と、朝鮮に対する日本の到底「受け身」とは言えない計画的な膨張と高圧的な干渉の実態を生々しく描いている点で、日清戦争についての語りを欠落させてきた冒頭の「国民史観」を根底から揺るがす同時代証言であると言わざるを得ない。一般の日本人が同書を読むと、『坂の上の雲』に描かれているのとは異質な「明治の日本人像」を発見する事は明らかである。

同書の証言価値を高めているのは著者の親日性である。バードは閔妃暗殺や朝鮮の国政改革に際しても日本政府の誠実な意図を信じようとしたのであり、朝鮮側から見れば時に理不尽なほど日本に対して好意的であったと言えよう。そのような著者の好意的な証言を通じてもなお伝わってくる実態は、後世の日本人の「アジア」をめぐる歴史認識から欠落したものの重大性を物語る。

バードが記録者として卓越しているのは、日本への愛情や時代に制約された偏見の故に筆を鈍らせる事はなかった点である。バードは個人的感情とは別の次元で冷徹に現実を描ききった。その結果、今日の我々はバードの主観とは切り離して、彼女の現実描写を歴史学的史料として扱う事ができるほど、『朝鮮紀行』は客観的な叙述になり得ている。例えばバードが閔妃暗殺に関していかに日本政府を弁護しようと、公使館の組織的な関与という彼女が記述している客観的な状況からして、日本政府を完全に免罪できるのかという疑問を読者は持つであろう。また日清戦争期の日本による朝鮮の国政改革の正当性をバードが認めたとしても、彼女自身が記録している日清戦争への国民の熱狂や王宮占拠という日本軍の行動に照らすと、「受け身」や善意とは言えない何かが叙述から立ち上ってくる。日露対立につながる構造を日清戦争期の日本の朝鮮政策の中に認め、ほかならぬ明治維新の指導者たちが策定した朝鮮政策と近世思考との連続性を示唆するなど、バードの洞察は今日から見て歴史の長期的本質を捉えた重要な問題提起である。前篇で浮かび上がったこれらの論点を議論すると共に、日清戦争期の朝鮮でバードが目撃した「日本の国の深部にあった深い病のあらわれ」[50] を「国民史観」との関連で考察する事も、後篇の核心となるであろう。

註

(1) 以下、前篇・後篇両方を含めて「本論考」とし、前篇のみを「本稿」と称する。

(2) 中塚明・安川寿之輔・醍醐聰著『NHK ドラマ「坂の上の雲」の歴史認識を問う』高文研、2010 年、1 頁。

(3) これには戦後の歴史教育のあり方も関わっている。例えば家永三郎は高校日本史教科書『新日本史』（三省堂）の 1983 年の部分改定検定申請原稿の中で日清戦争について「・・・戦場となった朝鮮では人民の反日抵抗がたびたびおこっている」と書いたが、文部省はこの箇所の削除を要求した。これは家永教科書裁判第三次訴訟の争点の一つとなったが、1997 年 8 月 29 日の最高裁判決は家永側を敗訴とした（中塚明著『現代日本の歴史認識』高文研、2007 年、62～63 頁）。

(4) 司馬遼太郎著『坂の上の雲』（全 8 巻）、文藝春秋、1999 年（文春文庫新装版、原著は 1969 年）。2009 年にドラマ化され、断続的に放映された。

(5) 司馬自身の表現（「国民がだいたいひとつになったのが、日露戦争だろう」「（日露戦争は）一種の祖国防衛戦争」など）については『坂の上の雲』の類似箇所の他に、司馬遼太郎著『「昭和」という国家』ＮＨＫ出版、

1999 年、45～46 頁。司馬の日露戦争観とその影響力については、中塚『現代日本の歴史認識』、8 頁；和田春樹著『日露戦争』（上）、岩波書店、2009 年、3～5 頁；三谷博著『明治維新を考える』岩波現代文庫、2012 年（原著 2006 年）、238～239 頁。本文下線部分のような見方は戦後一貫して存在していたが（中塚『現代日本の歴史認識』8 頁）、『坂の上の雲』によって一般に広く共有された。

(6)「司馬史観」ではなく「国民史観」という用語を使うのは、本論考が司馬個人の見解のみならず、その国民的共有の側面に注目するからである。

(7) 司馬は日清戦争も「多分に受け身」の防衛戦争であったとする（『坂の上の雲』第 2 巻、48～49 頁）。

(8)『坂の上の雲』では日清戦争について「日清戦争」「威海衛」などの章（第 2 巻）を充てるにすぎない。

(9) このような見方をとる近年の概説的な文献の例として、原田敬一著『日清・日露戦争』岩波新書、2007 年、第 5 章; 川島真・櫻井良樹・月脚達彦「日清戦争後の東アジア世界」三谷博・並木頼寿・月脚達彦編『大人のための近現代史　19 世紀編』第 26 章、東京大学出版会、2009 年、259 頁など。

(10) このような説明をする近年の文献の例として、原田、前掲書、第 7 章; 和田、前掲書、第 3 章など。但し同種の見方は以前からある（中塚明著『日清戦争の研究』青木書店、1968 年など）。むしろ司馬の「祖国防衛戦争」論は、日清・日露戦争を「侵略戦争」と位置づける、『坂の上の雲』が執筆された「当時の風潮」への違和感に由来していた（日清戦争を侵略戦争と見る考え方への言及は『坂の上の雲』第 2 巻、55 頁。日露戦争を侵略戦争と見る「当時の風潮」については、司馬『「昭和」という国家』46 頁）。

(11)「アジア」と鍵括弧付きなのは、本論考で問題にしたいのが地理的区分としてのアジア（日本も当然含む）ではなく、近代日本が、欧米と対等であろうとする自国と対峙するもの（後進的で従属させるべき相手）として対象化した、概念としての、一種のイデオロギーとしての「アジア」（日本を含まない）を指しているからである。本論考では中国・朝鮮を指す。

(12) 司馬の叙述を「昭和への拒絶」と戦後の「国民の物語」との関連で論じるのは、三谷『明治維新を考える』第 6 章。醍醐聡は三谷が言うところの「昭和への拒絶」史観を、「明治・昭和断絶史観」と呼ぶ（中塚・安川・醍醐、前掲書、第 8 章）。

(13) バードは結婚後ビショップと改姓したが、日本ではバードで知られているためこのままとした。なお本稿では訳文を以下の訳書に原則として基づき、変更を加えた箇所がある。イサベラ・バード著、時岡敬子訳『朝鮮紀行』講談社学術文庫、1998 年。原著も参照している。Isabella Bird (Mrs.Bishop), *Korea and Her Neighbours*, 2 vols., Cambridge: Cambridge University Press, 2012.

(14) 以下の記述は、イサベラ・バード著『中国奥地紀行 2』（東洋文庫）、平凡社、2010 年所収の金坂清則（訳者）による「解説」（369～401 頁）に基づく。

(15) イサベラ・バード著『完訳　日本奥地紀行』全 4 巻（東洋文庫）、平凡社、2012 年。

(16) Isabella Bird, *Journeys in Persia and Kurdistan Including a Summer in the Upper Karun Region and a Visit to the Nestorian Rayahs*, London: John Murray, 1891.

(17) 金坂、前掲「解説」、397～399 頁。

(18) 韓国では「東学農民運動」と呼ばれるが、日本では「東学党の乱」「甲午農民戦争」などと呼ばれてきた（三谷ほか編、前掲書、244 頁）。本稿ではバードの記述に合わせるため、主に「東学党の乱」を用いる。

(19) 正確にはヴラジヴァストークであるが、慣用に従う。

(20) 李氏朝鮮の首都である漢城府は日本の支配下で京城府と改名され、解放後はソウルとなった。本稿では煩雑さを避け、かつバードの記述に合わせるために「都」を意味する現在の名称「ソウル」のみを用いる。

(21) 高宗と閔妃を指すが（以下同様）、本稿では主に一般名詞である「国王」「王妃」を用いる。「閔妃」は日本の支配下で定着した慣用的な呼称であり、正確には王后閔氏、今日の韓国では諡号に基づいて明成皇后と敬意をこめて呼ばれている。

(22) 以下『朝鮮紀行』の引用は講談社学術文庫版に基づくため、［　］内は同文庫の頁数である。

(23) イサベラ・バード著、朴尚得訳『朝鮮奥地紀行』全 2 巻（東洋文庫）、平凡社、1994 年。

(24) 同上書（東洋文庫版）第 1 巻、364 頁；第 2 巻、396 頁。

(25) 同上書（東洋文庫版）第 2 巻、387～397 頁。

(26) 1876 年の日朝修好条規（江華条約）に基づいて 1877 年には釜山、1879 年に元山、1880 年に仁川が開港する。同条約は日本人居留民の犯罪には治外法権が適用される事を定めた不平等条約であった（角田房子著『閔妃暗殺』新潮社、1993 年［原著は 1988 年］、124～125 頁も参照）。

(27) 以下後篇の便宜のため、引用文末にローマ数字を付す。引用文中の改行は[改行]と記す。

(28) 一度目は、1882 年の壬午事変の際の民衆による日本公使館襲撃である。花房義質公使以下 28 名の館員は公使館に火を放った後、銃を乱射し刀を振りかざしつつ脱出し仁川へ逃れた（外出中であった 3 人の館員は路上で殺害）。しかし仁川でも襲撃されたため海へ逃れ、イギリス船で帰国する。この事件に日本は政府・国民共に激昂し、強硬な交渉の末に朝鮮側の謝罪・過大な賠償金・責任者の処罰などを内容とする済物浦条約を結ばせた。二度目は 1884 年の甲申事変の際の騒乱であり、竹添進一郎公使以下 300 名が公使館に火を放ち、仁川へ逃れた（角田、前掲書、138～139、148～149、164、199 頁）。

(29) 日本人居留民は治外法権を有していた上に、居留地の外部に現地人社会を持ち、彼らを最下級労働者として雇用する事によって帝国意識を育んだ（原田、前掲書、225 頁）。朝鮮各地で組織された日本人居留民会は、朝鮮側から見れば日本の侵略の一翼を担っており、後に閔妃暗殺に加わった「壮士」の中には居留民会の中心人物らが含まれていた（金文子著『朝鮮王妃殺害と日本人』高文研、2009 年、29 頁）。

(30) 東学党は 1895 年 1 月初に壊滅し、バードはソウルの市場で首領の首が二つ、三本の棒を交叉させた上につり下げられており、あと二つの首が棒から外れて土埃の中に転がり「後ろ側を大きく犬にかじられていた」のを子供たちが弄んでいるのを見た。三日後にもバードは首のない三人の東学党の首領の死体を凍りついた血しぶきの中で発見する［345～346］。日本人写真師村上天真もこれらの首の写真を撮影するため駆けつけたが、首は既に下ろされていたため、木にかけ直して撮影し「めざまし新聞」に送る。村上の「撮影したる大略」にこの経緯が記されており（金、前掲書、334 頁）、ここからバードの見た二つの首の主は崔在浩と安教善であったと推測される。東学党が単なる暴徒ではなくナショナリズムを持つ集団である事を見抜いたバードであったが、騒乱中に朝鮮を離れていたためもあり東学農民運動の抗日的性格については気付いておらず、日本に「干渉の口実」を与えた内乱という認識にとどまっている。しかしこの認識自体は、当時外国人が得られたと思われる情報から考えるとかえって自然である。同運動の抗日的性格と日本軍による弾圧の実態については、角田、前掲書、287～290 頁；趙景達著『異端の民衆反乱―東学と甲午農民戦争』岩波書店、1998 年、317 頁；中塚『現代日本の歴史認識』218～220 頁；原田、前掲書、71～72 頁；金、前掲書、354 頁；中塚明・井上勝生・朴孟洙『東学農民戦争と日本』高文研、2013 年など。

(31) 伊藤内閣が「国内政治で追いつめられていた」事を派兵決定の要因として指摘する見方（原田、前掲書、57 頁など）はあるが、バードは自身の観察に基づいてより長期的な要因を強調しようとする。

(32) 引用文 VIII 中の下線部のバードの観察の正しさは近年の研究（姜孝叔「第二次東学農民戦争と日清戦争」歴史学研究会編『歴史学研究』762 号、青木書店、2002 年 5 月）によっても裏付けられている。

(33) 大鳥圭介が穏やかな印象［64］から一変して「荒っぽく」なったというバードの印象の背景には、本国政府と軍部の両方を考慮せねばならない外交官としての大鳥の立場の難しさがあった。日清戦争の先発大隊のソウル入城（1894 年 6 月 14 日）を阻止しようとした大鳥の判断は外交的常識に基づいていたが、この「穏健さ」故に陸軍内での彼の評判は悪く、結局は更迭されて井上馨に公使の座を譲る（原田、前掲書、60・62 頁；金、前掲書、61～62 頁）。しかし大鳥は日清開戦直前には本国政府の意図を悟り、強硬外交の先頭に立っている。「・・・開戦ハ避クベカラズ」「如何ナル手段ニテモ執リ、開戦ノ口実ヲ作ルベシ」という陸奥宗光外相の内訓を受けて朝鮮政府に諸要求を提示し、王宮制圧につながる交渉を行ったのは大鳥であった（詳しくは和田、前掲書、116～121 頁。王宮制圧の経緯を含むバードの説明は［266］）。

(34) 日本側の公式戦史からは外され封印された事件であったが（中塚明著『歴史の偽造をただす―戦史から消された日本軍の「朝鮮王宮占領」』高文研、1997 年；原田、前掲書、86～87 頁；三谷ほか編、前掲書、248 頁など）、バードが日本軍の積極的な（偶発的ではない）王宮制圧を開戦の端緒として明確に指摘しているのは、日清戦争の本質を捉えた同時代証言であると言えよう。

(35) 日清戦争時の国民の熱狂については、木下直之著『戦争という見世物』ミネルヴァ書房、2014 年。バードの証言も同書も、対外戦争への国民の熱狂が日露戦争に始まるものではなかった事を例証する。

(36)「従軍人夫」（軍夫）は日清戦争の物資輸送の根幹を担い、15 万 4000 人が動員され 7000 人以上が死亡したと推定されている。兵士と異なり防寒具は自己調達とされたため、病気治療など困難な状況におかれた者が多く、戦病死しても兵士と違って「官報」に掲載される事も、従って日本軍死亡者数に含まれる事もなかった（原田、前掲書、77～80 頁）。戦勝に沸く国民からその存在を忘れ去られていった彼らの、破れた衣服で凍傷に苦しむ悲惨な姿を、バードは見逃さなかったのである。

(37) 朴泳孝は甲申事変（1884 年）に失敗した後、日本に亡命。日清戦争下で井上馨が朝鮮公使を引き受けた後、朝鮮に戻り、1894 年 12 月に内務大臣に就任。

(38) 角田、前掲書、345～346 頁に一部引用。

(39) 日清戦争の大義名分についてのバードの評価に関わってくる重要な点である。

(40) 1846～1926 年。陸軍中将。日清開戦時には陸軍内の反主流派として予備役に編入されていた。

(41) 数種の公式文書とは主にイギリス公使館筋の情報と、ソウルで刊行されていた英文雑誌 THE KOREAN REPOSITORY の 1896 年 3 月号に掲載された記事 “OFFICIAL REPORT CONCERNING THE ATTACK ON THE ROYAL PALACE” を指すのではないか。イギリス総領事ヒリアーは事件直後に、現場にいた人々を直接聴取した報告書（北京駐在イギリス公使宛、後に首相にも送付）を作成しており、金文子の引用している部分だけ見てもバードの記述と一致している。バードは事件直後にヒリアーの客としてイギリス公使館に滞在しており、この公式報告書と同じ内容の情報を入手できた（或いは後日公式文書を目にした）事は考えられる。後者の英文記事は「王宮事変に関する公報」と題して京城領事内田定槌によって邦訳されて明治天皇に奉呈されており、金文子の引用している内田訳の核心部分だけ見てもバードの記述と完全に一致している。従ってバードはこれらの英語の文書を参考にした可能性が高い（両文書の一部の邦訳と背景説明は、金、前掲書、37～39、271～272 頁）。一方、内田領事は事件直後から西園寺公望外務大臣臨時代理宛てに公式報告を、原敬外務次官宛てに私的報告を送り続けているが、バードは勿論見ていない。

(42)「廃后の詔勅」は三浦梧楼が事件前から計画していたものであるが（角田、前掲書、413～414 頁）、バードは行為の主体として三浦という主語を出していない。

(43) 角田や金によると、主要な役割を果たした三浦梧楼の背後には軍部特に陸軍があり、更に陸奥宗光外相なども事件が起こる事を予想していた可能性が高いという（角田、前掲書、429～439; 金、前掲書、III・IV 章など）。これが事実であるとすると、直接の関与者と日本政府を截然と区別する事はできなくなる。

(44) 王妃を殺害したのが朝鮮人であるかのような印象を持たせる箇所であるが、親日的な朝鮮政府の下で 3 名の朝鮮人が暗殺の下手人として処刑されている（角田、前掲書、424～425 頁）。

(45) 日本政府に対するバードの共感的なコメントは個人的な日本贔屓の表れであると共に、ロシアの南下を警戒するイギリスが、その防波堤の役を果たす日本に好意的態度をとっていた事と無縁ではないと思われる（角田、425 頁も参照）。特にバードは中央アジア旅行で英露のグレートゲームを実感しており、ロシアの脅威には敏感であったと推測される。

(46) 戦闘中でない日本兵の規律正しさと品行方正さにバードは何度か言及しており、後の日中戦争などでは見られないものであったと思われる。その一例として、道中出会った三件の葬列については「道路いっぱいに広がっていた日本の分遣隊が、右と左に一列縦隊となって葬列を通すのを見かけた。遺体が通るとき、兵士たちは帽子に手をかけて見送っていた」[372]。

(47) バードは当時の日本兵のこのような品位と残虐さの両面を描いている。後篇で論じたい。

(48)「独立」の延長線上にあったのが、バードも言及する 1897 年 10 月の「大韓帝国」宣言であった［554］。19 世紀末の東アジアにおける「独立」の意味については月脚達彦も論じている。自国の「『独立』や近代化に強い意志を持てば持つほど、日本の朝鮮侵略の論理に絡めとられてしまう」（月脚達彦「19 世紀東アジアにおける『独立』」三谷ほか編、前掲書、269～270 頁）近代朝鮮の矛盾を、バードは目撃していた。

(49) 荻生徂徠著（平石直昭校註）『政談』東洋文庫、平凡社、2011 年、161～162 頁など。後篇で説明。

(50) 和田、前掲書、183 頁。